

4～9世紀の西三河地域における集落の変化 —カマド・炉と貯蔵穴の位置関係を事例に—

岡田 紘 和

1. 古墳時代および古代集落研究の目的と方法

古墳時代～古代は国家形成期とも呼ばれ、社会のしくみが大きく変動した時期であると考えられている（都出 2011・福永 2014・菱田 2007 など）。本稿では、地方の集落遺跡における物質文化に焦点をあて、文化変化の過程を復元することを試みたい。

(1) 研究史と課題の所在

先行研究

若狭徹は、上毛野地域・榛名山東南麓クルマ地域を対象に、地域経営の全体像に迫った（若狭 2002）。首長による地域政策が経済成長や支配機構の充実を促したと論じ、中央の地方政策だけでなく、地域における自立的・能動的な動きの重要性を指摘した。

西日本では、松木武彦が吉備地域を対象に、弥生～古墳時代の人口動態をあきらかにしようと試みている（松木 2010・2014）。それによれば、吉備地域の住居数は古墳時代を通して増減を繰り返しており、背景に大きな社会変動があったことを示唆している。

菱田哲郎は、播磨地域において集落の通時的分析を行っている（菱田 2013）。7世紀前半に新たな集落が多数成立していることに注目し、集落動態と古墳の立地とを関連させることで、屯倉の設置に伴う大規模開発だと結論づけた。

課題の所在

個々の集落動向を通時的に把握し、地域ごとの集落の展開をあきらかにすることである。上に挙げたような事例研究を全国的に蓄積し、相互に比較・検討することが重要だと考える。

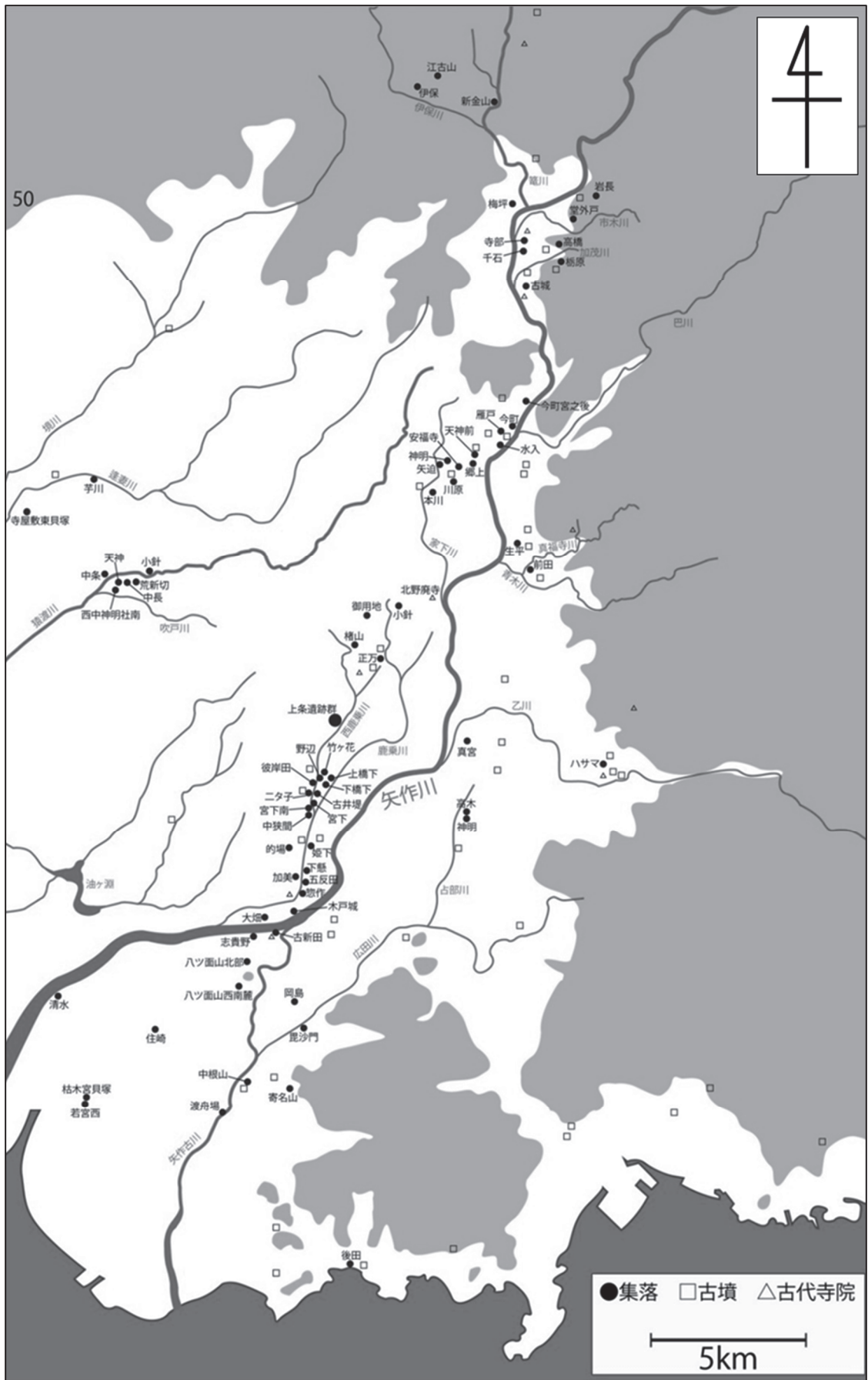
(2) 研究の目的と方法

本研究の目的

古墳時代～古代の特定地域における集落動向を、通時的にあきらかにすることである。

研究の方法

本稿では、矢作川流域における4～9世紀の集落遺跡を対象とし、竪穴建物における特徴的な要素（とりわけカマド・炉・貯蔵穴）の変遷を通時的に分析する。西三河地域は、集落が矢作川流域周辺に集中し（第1図参照）、地域全体の動態が比較的把握しやすい。



第1図 矢作川周辺の遺跡分布図（筆者作成） S=1:185,000

2. 火処と貯蔵穴の分析

(1) カマドと貯蔵穴の位置関係

日本列島におけるカマドの導入について

列島でのカマド導入は、弥生時代後期、原の辻遺跡（長崎県壱岐市）に遡る（合田、2013）。古墳時代前期前半は北部九州や近畿地方で散見され、中期前半に北部九州や近畿地方で普及・定形化、中期後半には関東や東北地域まで広がる（合田 2013・高久 2016）。

貯蔵穴について

貯蔵穴は床面に掘られた土坑で、木柵や木蓋の出土事例から水などを貯めた木柵や曲物の据付掘方だと考えられている（坂井ほか 2010）。古代には、須恵器をもちいた甕据付穴へ変化する（多々谷 2007・高橋 泰子 2015）が、本稿ではまとめて「貯蔵穴」として扱う。

カマドと貯蔵穴の位置関係について

ここではカマドと貯蔵穴の位置関係に注目して分析を行う。竪穴建物内におけるカマド・貯蔵穴それぞれの方位と、カマドに対する貯蔵穴の位置関係を示した（第2～4図参照）。

総括

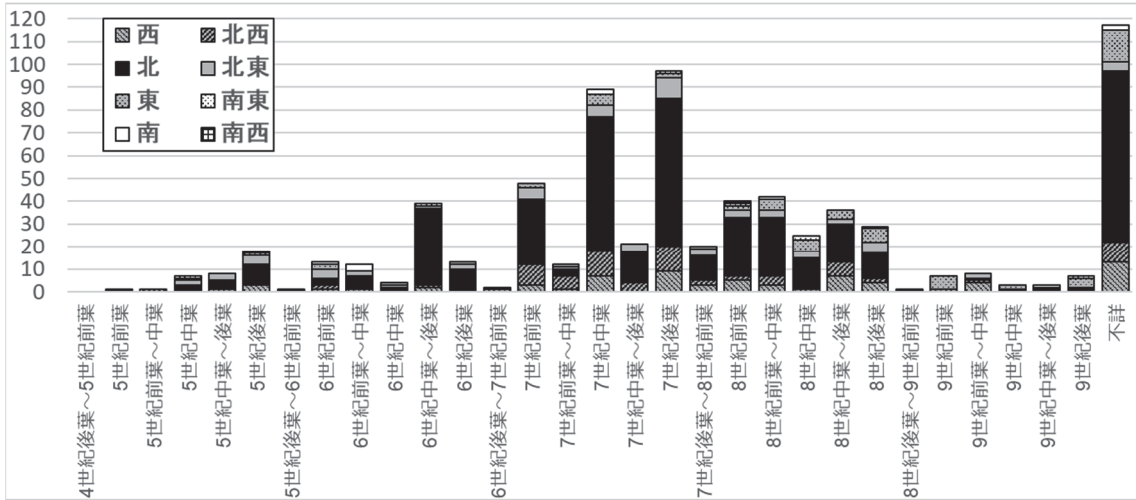
西三河では、カマドは5世紀中葉～後葉頃に導入され、カマドが列島全体へ拡散する時期と重なる。6世紀に入ると集落の数が減少し、カマドの普及もあまり進まない。ところが7世紀には集落数や竪穴建物数が増え、カマドをもつ竪穴建物の割合が大幅に増加する。

カマドの方位は、5-8世紀を通じて圧倒的に北側（北西・北・北東）が多い。一方、貯蔵穴はカマドの右側が多く、その傾向はとくに7世紀に成立した集落で顕著である。

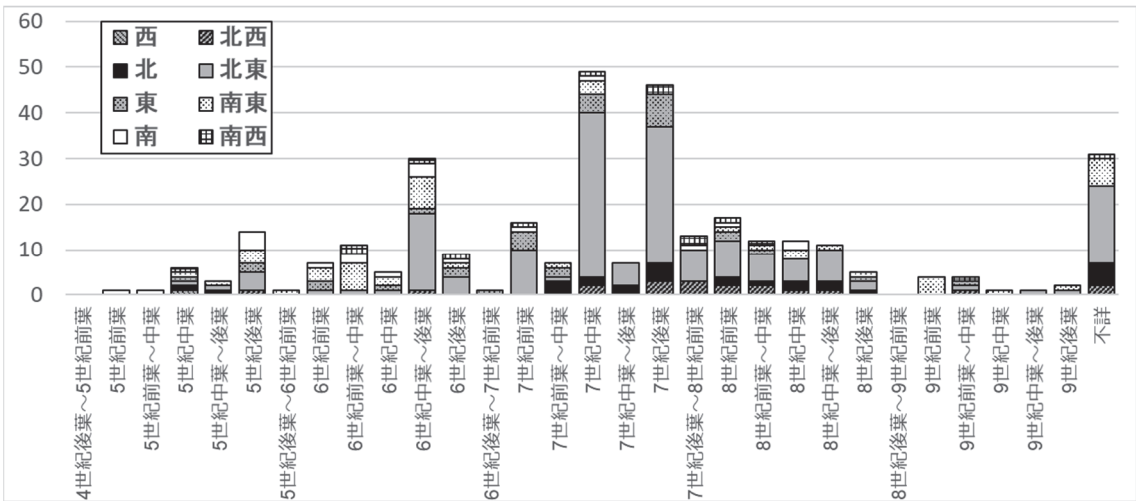
一方、北側にカマドを設置しながら、貯蔵穴を南側（南東・南・南西）、すなわちカマドの反対側に置く事例が一定数存在する。こうした事例は、比較的大規模な集落（梅坪遺跡・岩長遺跡・堂外戸遺跡・高橋遺跡・豊田市神明遺跡・岡崎市小針遺跡など）や、カマドを早くに導入した集落（生平遺跡・高木遺跡・若宮西遺跡など）で見られる。

貯蔵穴を南側に置く事例は、7-8世紀にかけて次第に減少し、[北側にカマド、その右側に貯蔵穴]という配置が、西三河全体で一般的となる。

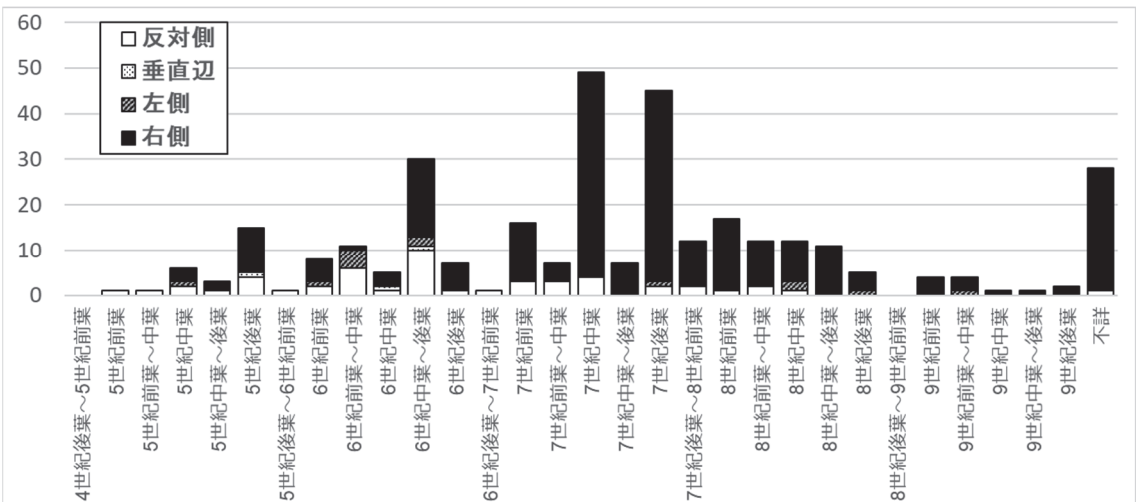
8-9世紀頃になると、梅坪遺跡などいくつかの遺跡で見られるように、[東にカマド、その右側に貯蔵穴]という新たな配置が多数を占めるようになる。



第2図 竪穴建物内におけるカマドの方位 (筆者作成)



第3図 カマドが検出された竪穴建物内における貯蔵穴の方位 (筆者作成)



第4図 竪穴建物内におけるカマドと貯蔵穴の位置関係 (筆者作成)

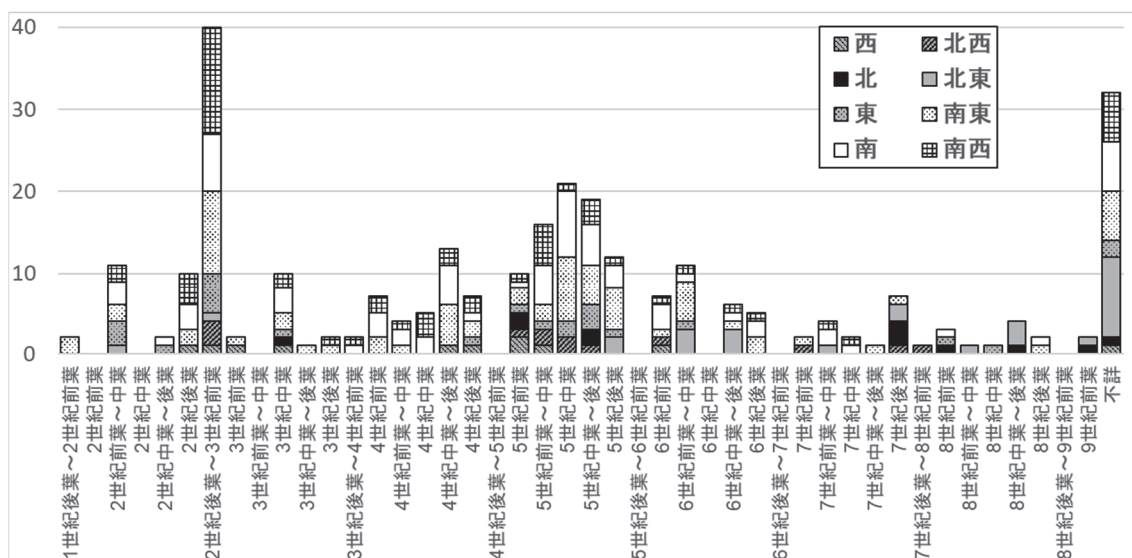
(2) 炉と貯蔵穴の位置関係

カマド導入以前の火処と貯蔵穴

カマドが導入される以前、西三河では炉（地床炉）がもちいられた。本節では、第1節と同様の分析をカマドが検出されなかった竪穴建物でも行った。火処が検出されない場合も、貯蔵穴が検出されていれば位置を示した（第5図参照）。

総括

炉の位置は中央が多い。中央以外の場合も、壁際には設置されない。また貯蔵穴は、弥生時代以来、東や南側（南東・南・南西）が多い。すべての事例にはあてはまらないが、カマド導入期頃までの貯蔵穴は、伝統的に東や南側を指向して設置されていたことがわかる。



第5図 カマドが検出されない竪穴建物内における貯蔵穴の方位（筆者作成）

3. 考察

(1) カマド導入に伴う文化変化のあり方

他地域におけるカマドと貯蔵穴の位置関係

関東では、7世紀に入ると、貯蔵穴はカマドに接するようになり、しかもカマドの右側が圧倒的に多いという（高橋 2003）。これは西三河の状況とほぼ一致する。

また群馬県域でも、貯蔵穴は多くの場合カマドの右側である（神谷 2005）。カマド方位は、5世紀後半～8世紀は北壁か東壁の中央だが、9世紀以降は東壁の南寄りあるいは南壁となり、これも西三河の動向と近似する。

笹森健一は、カマド・貯蔵穴・入口の位置関係を全国的に概観した（笹森 1990・2007）。貯蔵穴の位置は主に2つのパターンがあるという。①カマドが（入口からみて）奥に設けられたにもかかわらず、入口近くに置くことに強くこだわっている貯蔵穴、②カマドが奥に設けられたことに連動して入口にこだわらずに奥に移行した貯蔵穴、である。本稿では入口の検討はしなかったが、西三河でも入口が南側だったとすれば、一致すると言える。

西三河におけるカマド導入のあり方

カマドの位置は竪穴建物内の北側（北西・北・北東）が多く、貯蔵穴の位置はカマドの右側が圧倒的に多い。このことから、カマドが「北側にカマド、その右側に貯蔵穴」という体系ごと伝播したことが考察される。すなわちカマドという装置そのものだけでなく、周辺要素（おそらく土器なども）を含む生活様式が、まとめて導入された可能性が高い。

ところが比較的大規模な集落を中心に、カマドを北側に設置しながら、貯蔵穴をその反対側（＝南側）に置く事例が一定数みられる。筆者は、これは従来伝統を引き継いだ結果だと解釈している。カマド導入以前、貯蔵穴は住居内の南側（南東・南・南西）に置くことが、弥生時代以来、いわば緩やかな「常識」として定着していたと考えられる。新たな火処の導入にあたり、それを北壁に構築する点を取り入れたとしても、貯蔵穴まで北側に配置する（＝従来伝統に反する）ことには抵抗があったのかもしれない。

この現象は、新しい文化要素が伝播する際における、文化変化のひとつのあり方を示していると考ええる。地域内における大規模な集落（＝大きな人間集団）ほど、古い文化要素の痕跡を残しやすいと言えるのではなかろうか。梅坪遺跡や堂外戸遺跡、高橋遺跡、岡崎市小針遺跡では、カマドと貯蔵穴の方位や位置関係がばらばらであることがわかる（第1表参照）。新たな生活様式を受け入れるときの姿勢は非常に多様であり、どのような形で導入するかは、各世帯の判断に委ねられていたと推測できる。

西三河におけるカマド普及のあり方

「南側に貯蔵穴」は、おそらく弥生時代以来の緩やかな「常識」として、西三河で定着していた。それはカマド導入以後も一部引き継がれ、「北側にカマド、その反対側（南側）に貯蔵穴」という配置を生み出すに至った。しかもカマドが西三河で広く普及した7世紀以降も、この配置は比較的大規模な集落で採用され続ける。南側に貯蔵穴を置くという「常識」が、いかに強い影響を及ぼしていたかを物語っている。

ところが、7世紀以降に成立する新興集落では、ほとんどの竪穴建物で「北側にカマド、その右側に貯蔵穴」という配置が採用される。また比較的大規模な集落でも、「北側にカマド、その反対側（南側）に貯蔵穴」という配置は、時期が下るほど数を減らしている。

ここから窺えるのは、新たな文化要素の普及に伴う変化の過程である。カマド導入によって即座にすべてが変わるわけではない。しかし長期的にみると、それは確実に変化の起点になっており、時間を経る中で少しずつ進行していくのである。

また、その変化の速度は、人間集団の大きさによって異なることも強調したい。比較的小規模な集落ほど変化は急速で、新しい体系が素早く浸透する。一方、比較的大規模な集落では変化の速度は緩やかで、新旧の要素が入り混じった時期を経て、変化が進行する。

貯蔵穴配置の選択性・指向性

貯蔵穴が調理作業に関わる貯水施設（高橋 2015）だと仮定すれば、カマドの隣に配置するのが最も効率的だと考えられる。しかしカマドと離れた位置に貯蔵穴を置く事例が多くみられるように、頑なに南に貯蔵穴を置き続ける人々がいた。先に、南に貯蔵穴を置くのは弥生時代以来のいわば「常識」であったと推測したが、「北側にカマド、その右側に貯蔵穴」という体系が伝播してきた際、効率性よりも「南側に貯蔵穴」という従来慣習を選択・指向したのである。まさにここに、不確定要素（感情や当時の常識な

第1表 岡崎市小針遺跡におけるカマドと貯蔵穴の方位と位置関係（筆者作成）

				カマドの位置:○ 貯蔵穴の位置:●								貯蔵穴の位置(カマドとの位置関係)					
				西	北西	北	北東	東	南東	南	南西	右側	左側	垂直辺	反対側		
小針 (岡崎市)	A区	SI-54	6世紀前半			○	●						☆				
		SI-16	6世紀前半						●	○				☆			
		SI-46	6世紀前半						●	○					☆		
		SI-43	6世紀前半	○								●			☆		
		SI-73	6世紀前半			○				●							☆
		SI-109	6世紀前半			○				●							☆
		SI-135	6世紀前半			○				●							☆
		SI-37A	6世紀前半			○					●						☆
		SI-47	6世紀後半			○	●							☆			
		SI-55	6世紀後半			○	●							☆			
		SI-59	6世紀後半			○	●							☆			
		SI-78A	6世紀後半			○	●							☆			
		SI-115	6世紀後半			○	●							☆			
		SI-30	6世紀後半			○				●							☆
		SI-33	6世紀後半			○				●							☆
		SI-53	6世紀後半			○				●							☆
		SI-79A	6世紀後半			○				●							☆
		SI-94	6世紀後半			○				●							☆
		SI-48	6世紀後半			○				●		●					☆
		SI-28	6世紀後半			○						●					☆
		SI-37B	6世紀後半			○						●					☆
		SI-9	6世紀後半	○													
		SI-4	6世紀後半			○											
		SI-5	6世紀後半			○											
		SI-31	6世紀後半			○											
		SI-44	6世紀後半			○											
		SI-72	6世紀後半			○											
		SI-91A	7世紀中葉		○	●								☆			
		SI-21	7世紀中葉			○	●							☆			
		SI-22	7世紀中葉			○	●							☆			
		SI-38	7世紀中葉			○	●							☆			
		SI-61	7世紀中葉			○	●							☆			
		SI-10	7世紀中葉	○													
		SI-2	7世紀中葉					○									
SI-13	7世紀中葉								○								
SI-69	8世紀前半			○	●							☆					
SI-99	8世紀前半			○	●							☆					
SI-114	8世紀前半			○	●							☆					
SI-107	8世紀前半		○							●					☆		
SI-98	8世紀前半			○			●								☆		
SI-103	8世紀後半			○	●							☆					
SI-52	8世紀後半		○														
SI-39	8世紀後半			○													
SI-97	8世紀後半					○											

ど)を多分に孕んだ、非合理的存在としての人間の姿が見出せるのではないかと筆者は考える。

また、火処や貯蔵穴方位の変化は、生活様式だけでなく思想や世界観の変化とも関連していた可能性があり、今後の研究では視野に入れる余地がある。

まとめ

本稿では、4-9世紀の西三河地域における火処と貯蔵穴の位置関係から、文化変化の過程を考察した。新たな文化要素の受け入れ姿勢は様々で、前時代の伝統を引き継ぎ、たとえ非効率・非合理的であっても、その痕跡を選択的に残す世帯が存在した点に言及した。

それでもカマド受容は確実に変化の起点となり、時代が下るごとに徐々に浸透していく過程を窺えた。ただしその浸透の速度は、人間集団の規模が大きいほど緩やかで、古い文化要素の痕跡を残しやすいことも指摘した。

(2) 今後の課題と展望

主な課題を3点挙げたい。1つ目は竪穴建物内の他要素も併せて検討すること、2つ目は炉・カマド・貯蔵穴自体の構造や用途を分析すること、3つ目は他地域（とくに西三河にカマドを伝えた地域）の分析を行い、西三河地域と比較することである。

本稿では、西三河地域を事例に4-9世紀の地方集落における文化変化の過程を分析・考察した。こうした事例研究を積み重ねることで、古墳時代～古代の地域や社会に対する理解をさらに深めていけると考えている。

【謝辞】本稿は、2017年1月に名古屋大学大学院文学研究科に提出した修士論文のうち一部を加筆・修正したものである。修士論文の執筆にあたっては、山本直人先生・梶原義実先生をはじめ、多数の関係者の皆様からこの上ないご指導・ご協力を賜りました。この場をお借りして心からお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

参考文献

発掘調査報告書・調査概報

- 青井美稚子ほか、2012、『真宮遺跡Ⅱ』、岡崎市教育委員会：岡崎。
- 天野博之ほか、2001、『新金山遺跡』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第19集、豊田市教育委員会：豊田。
- 荒井信貴ほか、1994、『ハサマ遺跡発掘調査報告書』、岡崎市教育委員会：岡崎。
- 飯塚邦男ほか、2003、『梅坪遺跡Ⅶ』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第21集、豊田市教育委員会：豊田。
- 池本正明ほか、1989、『加美遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第8集、愛知県埋蔵文化財センター：弥富町。
- 池本正明ほか、1990a、『志貴野遺跡・小島遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第13集、愛知県埋蔵文化財センター：弥富町。
- 池本正明ほか、1990b、『岡島遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第14集、愛知県埋蔵文化財センター：弥富町。
- 池本正明ほか、1993、『岡島遺跡Ⅱ・不馬入遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第43集、愛知県埋蔵文化財センター：弥富町。
- 池本正明ほか、2003、『木戸城遺跡・古新田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第111集、愛知県埋蔵文化財センター：弥富町。
- 池本正明ほか、2009、『下懸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第144集、愛知県埋蔵文化財センター：弥富町。
- 鶴飼堅証、1999、『中条遺跡』『愛知県埋蔵文化財情報』14、pp.82-83、愛知県教育委員会：名古屋。
- 鶴飼堅証、2000、『中条遺跡』『愛知県埋蔵文化財情報』15、pp.66-67、愛知県教育委員会：名古屋。
- 鶴飼堅証、2001、『中条遺跡』『愛知県埋蔵文化財情報』16、p.71、愛知県教育委員会：名古屋。
- 鶴飼堅証、2002、『中条遺跡』『愛知県埋蔵文化財情報』17、pp.68-69、愛知県教育委員会：名古屋。
- 鶴飼堅証、2006、『中条遺跡』『愛知県埋蔵文化財情報』21、p.22、愛知県教育委員会：名古屋。
- 大野真規ほか、1996、『小針遺跡発掘調査報告書』、知立市教育委員会：知立。
- 大野真規ほか、1997、『小針遺跡Ⅱ』、知立市教育委員会：知立。
- 大野真規ほか、1998、『小針遺跡Ⅲ』、知立市教育委員会：知立。
- 大橋 勤ほか、1974、『伊保遺跡』、猿投遺跡調査会。
- 岡本茂史ほか、1986、『知立市西中遺跡群発掘調査報告書』、知立市教育委員会：知立。
- 岡本茂史ほか、1987、『知立市西中遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』、知立市教育委員会：知立。
- 岡本茂史ほか、1988、『知立市西中遺跡群発掘調査報告書Ⅲ』、知立市教育委員会：知立。
- 岡本茂史ほか、1989、『知立市西中遺跡群発掘調査報告書Ⅳ』、知立市教育委員会：知立。
- 岡本茂史ほか、1990、『知立市西中遺跡群発掘調査報告書Ⅴ』、知立市教育委員会：知立。
- 岡本茂史ほか、1992、『西中神明社南遺跡』、知立市教育委員会：知立。
- 岡安雅彦ほか、1996、『御用地遺跡』、安城市教育委員会：安城。
- 岡安雅彦ほか、2012、『惣作遺跡』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第28集、安城市教育委員会：安城。
- 長田友也ほか、2015、『高橋遺跡中央区・南西区』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第66集、豊田市教育委員会：豊田。
- 長田友也ほか、2016、『高橋遺跡北東区』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第67集、豊田市教育委員会：豊田。
- 加藤安信ほか、1989、『中根山遺跡発掘調査報告書』、吉良町教育委員会：吉良町。
- 神谷真佐子ほか、2004、『鹿乗川流域遺跡群Ⅱ』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書13、安城市教育委員会：安城。
- 神谷真佐子ほか、2005、『鹿乗川流域遺跡群Ⅲ』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書15、安城市教育委員会：安城。
- 神谷真佐子ほか、2006、『鹿乗川流域遺跡群Ⅳ』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書17、安城市教育委員会：安城。
- 神谷真佐子ほか、2008、『鹿乗川流域遺跡群Ⅴ』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書21、安城市教育委員会：安城。
- 神谷真佐子ほか、2009、『鹿乗川流域遺跡群Ⅵ』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書23、安城市教育委員会：安城。
- 神谷真佐子ほか、2011、『鹿乗川流域遺跡群Ⅶ』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書26、安城市教育委員会：安城。
- 川崎みどりほか、2000、『中狭間遺跡』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第6集、安城市教育委員会：安城。

- 川崎みどりほか、2002、『古井堤遺跡・ニタ子遺跡』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第9集、安城市教育委員会：安城。
- 川崎みどりほか、2003、『宮下遺跡』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第11集、安城市教育委員会：安城。
- 川崎みどりほか、2004、『姫下遺跡 大畑遺跡 長先遺跡』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第14集、安城市教育委員会：安城。
- 川崎みどりほか、2008、『野辺遺跡』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第20集、安城市教育委員会：安城。
- 川崎みどりほか、2013a、『彼岸田遺跡』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第30集、安城市教育委員会：安城。
- 川崎みどりほか、2013b、『宮下遺跡Ⅱ』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第31集、安城市教育委員会：安城。
- 小嶋廣也ほか、2002、『今町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第105集、愛知県埋蔵文化財センター：弥富町。
- 斎藤嘉彦ほか、1985、『西中遺跡Ⅰ』、知立市教育委員会：知立。
- 斎藤嘉彦ほか、1999、『小針遺跡』、岡崎市教育委員会：岡崎。
- 斎藤嘉彦ほか、2001、『国指定遺跡真宮遺跡』岡崎市埋蔵文化財発掘調査報告書、岡崎市教育委員会：岡崎。
- 斎藤嘉彦ほか、2003、『高木・神明遺跡』、岡崎市教育委員会：岡崎。
- 斎藤嘉彦ほか、2004、『生平遺跡』岡崎市埋蔵文化財発掘調査報告書、岡崎市教育委員会：岡崎。
- 斎藤嘉彦ほか、2006、『正万遺跡』岡崎市埋蔵文化財発掘調査報告書、岡崎市教育委員会：岡崎。
- 斎藤嘉彦ほか、2008、『前田遺跡』岡崎市埋蔵文化財発掘調査報告書、岡崎市教育委員会：岡崎。
- 酒井俊彦ほか、1991、『清水遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第25集、愛知県埋蔵文化財センター：弥富町。
- 酒井俊彦ほか、2002、『郷上遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第98集、愛知県埋蔵文化財センター：弥富町。
- 杉浦裕幸ほか、1995、『梅坪遺跡Ⅱ』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第3集、豊田市教育委員会：豊田。
- 杉浦裕幸ほか、1996、『梅坪遺跡Ⅲ』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第5集、豊田市教育委員会：豊田。
- 杉浦裕幸ほか、1997、『梅坪遺跡Ⅳ』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第7集、豊田市教育委員会：豊田。
- 杉浦裕幸ほか、1998、『梅坪遺跡Ⅴ』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第9集、豊田市教育委員会：豊田。
- 杉浦裕幸ほか、1999、『梅坪遺跡Ⅵ』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第11集、豊田市教育委員会：豊田。
- 杉浦裕幸ほか、2009、『郷上遺跡』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第35集、豊田市教育委員会：豊田。
- 杉浦裕幸ほか、2010、『今町宮之後遺跡』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第40集、豊田市教育委員会：豊田。
- 杉浦裕幸ほか、2011、『寺部遺跡』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第45集、豊田市教育委員会：豊田。
- 杉浦裕幸ほか、2013、『寺部遺跡Ⅱ』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第52集、豊田市教育委員会：豊田。
- 鈴木正貴ほか、2001、『天神前遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第96集、愛知県埋蔵文化財センター：弥富町。
- 鈴木正貴ほか、2002、『矢迫遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第102集、愛知県埋蔵文化財センター：弥富町。
- 鈴木正貴ほか、2012、『惣作遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第172集、愛知県埋蔵文化財センター：弥富町。
- 高橋信明ほか、2003、『愛知県埋蔵文化財情報』18、愛知県埋蔵文化財センター：弥富町。
- 田中俊輔ほか、2010、『栃原遺跡』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第43集、豊田市教育委員会：豊田。
- 永井邦仁ほか、2005、『水入遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第108集、愛知県埋蔵文化財センター：愛知県弥富町。
- 服部信博ほか、2001、『川原遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第91集、愛知県埋蔵文化財センター：愛知県弥富町。
- 樋上 昇ほか、2003、『本川遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第100集、愛知県埋蔵文化財センター：弥富町。
- 松井孝宗ほか、2004、『古城遺跡』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第23集、豊田市教育委員会：豊田。
- 松井直樹ほか、1990、『志貴野遺跡』西尾市埋蔵文化財発掘調査報告書、西尾市教育委員会：西尾。
- 松井直樹ほか、1991、『八ツ面山北部遺跡Ⅰ』西尾市埋蔵文化財発掘調査報告書、西尾市教育委員会：西尾。
- 松井直樹ほか、1992、『八ツ面山北部遺跡Ⅱ』西尾市埋蔵文化財発掘調査報告書、西尾市教育委員会：西尾。
- 松井直樹ほか、1993、『八ツ面山北部遺跡Ⅲ』西尾市埋蔵文化財発掘調査報告書、西尾市教育委員会：西尾。
- 松井直樹ほか、1994a、『古新田遺跡』西尾市埋蔵文化財発掘調査報告書、西尾市教育委員会：西尾。
- 松井直樹ほか、1994b、『岡島遺跡』西尾市埋蔵文化財発掘調査報告書第1集、西尾市教育委員会：西尾。
- 松井直樹ほか、1996、『住崎遺跡』西尾市埋蔵文化財発掘調査報告書第4集、西尾市教育委員会：西尾。
- 松井直樹ほか、1997、『若宮西遺跡』西尾市埋蔵文化財発掘調査報告書第5集、西尾市教育委員会：西尾。
- 松井直樹ほか、1998、『毘沙門遺跡・岡島遺跡』西尾市埋蔵文化財発掘調査報告書第6集、西尾市教育委員会：西尾。
- 松井直樹ほか、2005、『枯木宮貝塚Ⅰ』西尾市埋蔵文化財発掘調査報告書第14集、西尾市教育委員会：西尾。
- 松井直樹ほか、2006、『枯木宮貝塚Ⅱ』西尾市埋蔵文化財発掘調査報告書第15集、西尾市教育委員会：西尾。
- 松田 訓ほか、1993、『伊保遺跡・根川3号墳・坂口遺跡・高樋遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第46集、愛知県埋蔵文化財センター：弥富町。
- 松田 訓ほか、2001、『岡島遺跡Ⅲ・大毛池田遺跡Ⅲ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第94集、愛知県埋蔵文化財センター：弥富町。
- 松田 訓ほか、2005、『小針遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第136集、愛知県埋蔵文化財センター：弥富町。
- 松田 訓ほか、2007、『上橋下遺跡 鹿乗川流域遺跡群』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第145集、愛知県埋蔵文化財センター：弥富町。
- 三田敦司ほか、2008、『寄名山遺跡発掘調査報告書』吉良町埋蔵文化財発掘調査報告書第4集、吉良町教育委員会：吉良町。
- 宮腰健司ほか、2009、『惣作遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第158集、愛知県埋蔵文化財センター：弥富町。
- 宮腰健司ほか、2012、『姫下遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第168集、愛知県埋蔵文化財センター：弥富町。
- 森 泰通ほか、1996、『神明遺跡』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第6集、豊田市教育委員会：豊田市。
- 森 泰通ほか、2001、『神明遺跡Ⅱ』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第17集、豊田市教育委員会：豊田市。

- 森 泰通ほか、2010、『堂外戸遺跡』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第44集、豊田市教育委員会：豊田。
- 森 泰通ほか、2012、『神明遺跡Ⅲ』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第50集、豊田市教育委員会：豊田市。
- 森 泰通ほか、2013、『江古山遺跡』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第55集、豊田市教育委員会：豊田。
- 矢田直幸ほか、1995、『芋川遺跡』刈谷市教育委員会：刈谷。
- 山本ひろみほか、1999、『千石遺跡』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第14集、豊田市教育委員会：豊田。
- 山本ひろみほか、2000、『岩長遺跡』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第15集、豊田市教育委員会：豊田。

論文・研究書など

- 相原康二、1992、「古代の集落と生活」『東北・北海道』新版『古代の日本』第9巻、pp.137-160、角川書店：東京。
- 今津勝紀、2003、「日本古代の村落と地域社会」『考古学研究』50-3、pp.57-74、考古学研究会：岡山。
- 岩崎卓也、1979、「古墳と地域社会」『日本考古学を学ぶ』(3)、pp.142-155、有斐閣：東京。
- 岩崎卓也、1992、「ムラと共同体」『古墳の造られた時代』古墳時代の研究12、pp.35-54、雄山閣：東京。
- 大塚初重、1990、「ムラの変貌—古墳時代村落の構造」『日本村落史講座』2、pp.84-101、雄山閣：東京。
- 小笠原好彦、1989、「古墳時代の堅穴住居集落にみる単位集団の移動」『国立歴史民俗博物館研究報告』22、pp.1-27、国立歴史民俗博物館：佐倉。
- 小笠原好彦、1992、「近畿の古代集落と豪族居館」『近畿Ⅰ』新版『古代の日本』第5巻、pp.221-244、角川書店：東京。
- 小笠原好彦、1996、「古代の家族」『家族と住まい』考古学による日本歴史15、pp.55-70、雄山閣：東京。
- 門脇禎二、1970、「序論」『古代国家』講座日本史1、pp.1-28、東京大学出版会：東京。
- 神谷佳明、2005、「炬からカマドへ 農民たちの生活」『群馬の遺跡5』、pp.77-101、上毛新聞社：前橋。
- 神谷佳明、2004、「古代の集落遺跡」『群馬の遺跡6』、pp.121-146、上毛新聞社：前橋。
- 亀田修一、2009、「考古学からみた渡来人」『季刊考古学』106、pp.68-73、雄山閣：東京。
- 河村好光、1991、「弥生ムラ・古墳づくり・律令国家」『考古学研究』37-4、pp.122-138、考古学研究会：岡山。
- 菊地芳朗、2001、「東北地方の古墳時代集落 —その構造と特質—」『考古学研究』47-4、pp.55-75、考古学研究会：岡山。
- 菊地芳朗、2014、「集落と古墳時代社会」『21世紀の古墳時代像』古墳時代の考古学9、pp.21-34、同成社：東京。
- 熊谷公男、2011、「古代史からみた古墳時代」『季刊考古学』117、pp.18-23、雄山閣：東京。
- 合田朱美、2013、「火処」『人々の暮らしと社会』古墳時代の考古学6、pp.95-104、同成社：東京。
- 甲元真之、1986、「農耕集落」『岩波講座日本考古学』4、pp.77-125、岩波書店：東京。
- 近藤義郎、1952、「佐良山古墳群」『佐良山古墳群の研究』、pp.9-53、津山市：津山。
- 近藤義郎、1959、「共同体と単位集団」『考古学研究』6-1、pp.13-22、考古学研究会：岡山。
- 酒井龍一、1990、「拠点集落と弥生社会」『日本村落史講座』2、pp.65-83、雄山閣：東京。
- 坂口 一、1990、「5世紀代における集落の拡大現象」『古代文化』42-2、pp.16-29、古代学協会：京都。
- 坂井秀弥ほか、2010、『発掘調査のてびき —集落遺跡発掘編—』、文化庁文化財部記念物課：東京。
- 榊田朋広、2010、「カマド受容の広域比較研究のための予備的検討」『比較考古学の新天地』、pp.719-729、同成社：東京。
- 佐々木憲一、2011、「古墳時代像と国家概念」『季刊考古学』117、pp.48-53、雄山閣：東京。
- 佐々木達夫、1974、「古代村落の変遷過程」『原始古代社会研究』Ⅰ、pp.7-76、校倉書房：東京。
- 笹森健一、1990、「堅穴住居の使い方」『集落と豪族居館』古墳時代の研究2、pp.47-68、雄山閣：東京。
- 笹森健一、2007、「古墳時代から奈良・平安時代の堅穴建物」『住まいの考古学』、pp.97-151、学生社：東京。
- 佐原 真、1986、「総論」『岩波講座日本考古学』4、pp.1-35、岩波書店：東京。
- 重藤輝行、2012、「北部九州における古墳時代集落の展開 —浮羽地域を事例として—」『日韓集落の研究（最終報告書）』、pp.377-392、日韓集落研究会：福岡。
- 下垣仁志、2011、「畿内」『季刊考古学』117、pp.65-70、雄山閣：東京。
- 庄子士郎編、1978、『愛知県 地学のガイド』、コロナ社：東京。
- 杉井 健、2003、「生活様式における中心周縁関係の成立とその意義」『先史学・考古学論究』Ⅳ、pp.101-125、龍田考古会：熊本。
- 杉井 健、2005、「古墳時代集落研究序説」『待兼山考古学論集 —都出比呂志先生退任記念—』、pp.755-788、大阪大学考古学友の会：豊中。
- 高久健二、2012、「古墳時代における集落動態と竈の導入・土器組成の変化について」『日韓集落の研究（最終報告書）』、pp.393-412、日韓集落研究会：福岡。
- 高久健二、2016、「竈」『季刊考古学』137、pp.53-57、雄山閣：東京。
- 高田貫太、2011、「朝鮮三国時代と古墳時代接点」『季刊考古学』117、pp.24-30、雄山閣：東京。
- 高橋一夫、1975、「和泉・鬼高期の諸問題」『原始古代社会研究』Ⅱ、pp.63-105、校倉書房：東京。
- 高橋一夫、1990、「集落の形態 東日本の集落」『集落と豪族居館』古墳時代の研究2、pp.79-91、雄山閣：東京。
- 高橋一夫、2003、『古代東国の考古学的研究』、六一書房：東京。
- 高橋泰子、2015、「貯蔵穴から甕掘付穴へ」『季刊考古学』131、pp.24-27、雄山閣：東京。
- 多末純一、2016、「集落」『季刊考古学』137、pp.47-52、雄山閣：東京。
- 多々谷香理、2007、「貯蔵穴の変遷」『月刊考古学ジャーナル』559、pp.15-19、ニューサイエンス社：東京。
- 田中義昭、1979、「弥生期における耕地と集落」『日本考古学を学ぶ』(3)、pp.120-141、有斐閣：東京。
- 辻田淳一郎、2012、「古墳文化の多元性と一元性」『内外の交流と時代の潮流』古墳時代の考古学7、pp.44-56、同成社：東京。

- 都出比呂志、1983、「環濠集落の成立と解体」『考古学研究』29-4、pp.14-32、考古学研究会：岡山。
- 都出比呂志、1989、『日本農耕社会の成立過程』、岩波書店：東京。
- 都出比呂志、2011、『古代国家はいつ成立したか』、岩波書店：東京。
- 寺田良喜、2010、「南武蔵における5世紀の変革」『比較考古学の新天地』、pp.351-361、同成社：東京。
- 永井邦仁、2010、「西三河の古代集落」『比較考古学の新天地』、pp.538-547、同成社：東京。
- 永井邦仁、2010、「碧海台地東縁の古代集落」『研究紀要』11、pp.51-60、愛知県埋蔵文化財センター：愛知県弥富町。
- 中川 正、1995、「文化伝播」『文化地理学入門』、pp.187-208、東洋書林：東京。
- 新納 泉、2001、「空間分析からみた古墳時代社会の地域構造」『考古学研究』48-3、pp.56-74、考古学研究会：岡山。
- 能登 健、1990、「三ツ寺I遺跡の成立とその背景」『古代文化』42-2、pp.3-15、古代学協会：京都。
- 橋本達也、2011、「九州」『季刊考古学』117、pp.71-76、雄山閣：東京。
- 橋本博文、2001、「古墳時代の社会構造と組織」『村落と社会の考古学』現代の考古学6、pp.161-198、朝倉書店：東京。
- 服部敬史、1979、「古代集落の形と特徴」『日本考古学を学ぶ』(3)、pp.16-33、有斐閣：東京。
- 土生田純之、2016、「東日本の渡来人」『季刊考古学』137、pp.71-75、雄山閣：東京。
- 林 正憲、2010、「古墳時代における階層構造」『考古学研究』57-3、pp.22-36、考古学研究会：岡山。
- 坂 靖、2008、「奈良盆地の古墳時代集落と居館」『考古学研究』55-2、pp.29-44、考古学研究会：岡山。
- 坂 靖、2009、「豪族居館・集落研究の現状と課題」『季刊考古学』106、pp.74-78、雄山閣：東京。
- 樋上 昇、2004、「集落・居館・都市的遺跡と生活用具」『考古資料大観』10、pp.283-298、小学館：東京。
- 菱田哲郎、2007、『古代日本 国家形成の考古学』、京都大学学術出版会：京都。
- 菱田哲郎、2013、「7世紀における地域社会の変容」『国立歴史民俗博物館研究報告』179、pp.115-135、国立歴史民俗博物館：佐倉。
- 広瀬和雄、2004、「弥生・古墳時代の集落と地域社会」『東アジアにおける国家の形成』日本史講座1、pp.241-265、東京大学出版会：東京。
- 広瀬和雄、2011、「体系的な古墳時代像を求めて」『季刊考古学』117、pp.14-17、雄山閣：東京。
- 広瀬和雄、2016、「総論 古墳時代の集落」『月刊考古学ジャーナル』691、pp.3-4、ニューサイエンス社：東京。
- 福永伸哉、2014、「古墳時代と国家形成」『21世紀の古墳時代像』古墳時代の考古学9、pp.7-20、同成社：東京。
- 藤沢 敦、2001、「倭の周縁における境界と相互関係」『考古学研究』48-3、pp.41-55、考古学研究会：岡山。
- 藤沢 敦、2011、「古墳時代の「境界」と「民族」」『季刊考古学』117、pp.54-59、雄山閣：東京。
- 藤沢 敦、2012、「住居と集落」『古墳時代（下）』講座日本の考古学8、pp.297-323、青木書店：東京。
- 藤沢 敦、2016、「古墳時代の農民と集落」『月刊考古学ジャーナル』691、pp.5-9、ニューサイエンス社：東京。
- 松木武彦、2010、『古備地域における巨大古墳形成過程の研究』、岡山大学：岡山。
- 松木武彦、2012、「西日本古備南部における弥生・古墳時代の集落と社会」『日韓集落の研究（最終報告書）』、pp.358-376、日韓集落研究会：福岡。
- 松木武彦、2014、「人口と集落動態からみた弥生・古墳移行期の社会変化」『国立歴史民俗博物館研究報告』185、pp.139-154、国立歴史民俗博物館：佐倉。
- 松村一良、1991、「西海道の官衙と集落」『九州・沖縄』新版『古代の日本』第3巻、pp.251-274、角川書店：東京。
- 松村恵司、1989、「村のくらし」『古代の都と村』古代史復元9、pp.50-58、講談社：東京。
- 水内俊雄、2004、「都市インナーリングをめぐる社会地理」『空間の社会地理』シリーズ人文地理学5、pp.23-58、朝倉書店：東京。
- 溝口孝司、2001、「弥生時代の社会」『村落と社会の考古学』現代の考古学6、pp.135-160、朝倉書店：東京。
- 三好 玄、2016、「畿内の古墳時代集落」『月刊考古学ジャーナル』691、pp.10-13、ニューサイエンス社：東京。
- 村上恭通、2001、「古墳出現前夜の「地域性」」『考古学研究』48-3、pp.20-40、考古学研究会：岡山。
- 矢澤修次郎、2000、「中心と周縁」『キーワード地域社会学』、pp.120-121、ハーベスト社：田無。
- 山田俊輔、2010、「古墳時代中期における地域社会の変化」『比較考古学の新天地』、pp.423-432、同成社：東京。
- 若狭 徹、2002、「古墳時代の地域経営」『考古学研究』49-2、pp.108-127、考古学研究会：岡山。
- 若狭 徹、2007、『古墳時代の水利社会研究』、学生社：東京。
- 若狭 徹、2016、「東国の古墳時代集落」『月刊考古学ジャーナル』691、pp.14-18、ニューサイエンス社：東京。
- 和島誠一、1948、「原始聚落の構成」『日本歴史学講座』、pp.1-32、東京大学歴史学研究会：東京。
- 和田晴吾、2003、「古墳時代の生業と社会」『考古学研究』50-3、pp.43-56、考古学研究会：岡山。

